

ダニエル書 - 第百六十三号

預言を解き明かす：ダニエル書第十一章を探る

Jeff Pippenger

2024-03-28

これからダニエル書第11章を読み進めていきます。

また、メディア人ダリウスの第一年に、まさに私自身が、彼を支え、強めるために立った。今、私はあなたに真理を示そう。見よ、さらにペルシアには三人の王が立つ。そして第四の者は彼らすべてよりはるかに富む。その富による力によって、彼はすべての者を奮い立たせ、ギリシアの王国に対して立ち向かわせるだろう。そして強大な王が立ち上がり、広大な支配権をもって治め、自分の意のままに行うだろう。だが彼が興ると、その王国は砕かれ、天の四方に向けて分けられる。それは彼の子孫のものとはならず、彼が治めた権勢に見合うものでもない。というのも、その王国は根こそぎにされ、彼ら以外の他の者たちのものとなるからである。ダニエル書 11:1-4。

ガブリエルはまず、ダレイオスの治世第一年にも自分が彼と共に働いたことをダニエルに知らせる。その年は、ダレイオスの甥であり将軍である者がバビロンを攻略し、ベルシャツアルを殺した年である。十章一節によれば、ダニエルがこの幻を受けているのはキュロスの第三年であるから、ガブリエルは「終わりの時」を表す象徴として、ダレイオスとキュロスの双方を指し示している。紀元前538年に、メディア・ペルシア帝国がバビロンを陥落させ、ベルシャツアルを討った。

「キュロスはバビロンを包囲し、紀元前538年に策略によってこれを攻略した。そして、ペルシア人が殺害したベルシャザルの死とともに、バビロン王国はその存在を終えた。」 Uriah Smith, Daniel and the Revelation, 46.

紀元前538年に、ダニエルは第九章を書き記した。

「前章 [第八章] に記録されている幻は、紀元前538年、ベルシャザルの第三年に与えられた。同じ年、すなわちダリウスの第一年でもあるその年に、本章 [第九章] に叙述されている出来事が起こった。」 ウライア・スミス『ダニエル書と黙示録』205頁

紀元前538年、ダリウスの第一年、すなわちベルシャツアルの第三にして最後の年に、主はカルデヤの地を罰し、それを荒廃させた。

この全地は荒れ果て、驚きの的となる。これらの諸国民は七十年のあいだバビロンの王に仕える。そして、七十年が満ちたとき、主は言われる。わたしは彼らの不義のゆえにバビロンの王とその国を罰し、カルデヤ人の地を永遠の荒廃とする。エレミヤ書 25章11、12節。

第十節において、主はバビロンへの刑罰へと導かれるにあたり、「のちに」という語を用いておられる。バビロンが荒廃させられた「のちに」、主は神の民のためにその善き御業を行われるのである。

主はこう言われる. バビロンで七十年が満ちたなら、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたをこの所に帰らせることによって、あなたがたに対するわたしの良いことばを成就する. エレミヤ書 25:10.

七十年間の捕囚は紀元前606年に始まった.

「その七十年は紀元前606年に始まったので、ダニエルは、それらがいまや終結に近づいていることを理解した。」ウライア・スミス『Daniel and the Revelation』205頁.

七十年の捕囚は紀元前606年に始まり、紀元前536年に終わったが、それは紀元前538年のベルシャザルの死とバビロンの荒廃の二年後であった. それはクロスの第三年であった. ガブリエルは、ヒデケル川の預言をクロス第三年に位置づけ、さらに第十一章の叙述をダリヨスの第一年に言及することによって始めており、そうすることによって二つの特定の年を示しているのである. 紀元前538年と紀元前536年は、いずれも定められた時であった. 紀元前538年は七十年の預言が終結するための定められた時であり、紀元前536年は、紀元前538年の「後に」、主が御自分の民のためにその良き御業を行われるという、定められた預言の時であった.

紀元前538年と紀元前536年はいずれも「定められた時」であり、二人の歴史的人物によって表されている. ひとりにはメディアの最初の王、もうひとりにはペルシャの最初の王である. 文字どおりのイスラエルが文字どおりのバビロンで捕囚となっていた七十年の終わりは、西暦538年から1798年まで、霊的イスラエルが霊的バビロンで捕囚となっていた千二百六十年を表していた. 1798年は「定められた時」であり、その後、預言的に「終わりの時」と特定される期間が始まった. 「定められた時」として表される紀元前538年と紀元前536年もまた、「終わりの時」と表される期間の始まりを示している.

「地上にある神の教会は、この容赦ない迫害の長い期間のあいだ、捕囚の時代にバビロンで囚われの身となっていたイスラエルの子らと同様、まことに捕囚の状態にあった。」『国と預言者』714頁.

すべての預言は、最初に成就した時代よりも、より明確には終わりの日々に向けて語られている. したがって、紀元前538年とダリヨス王、ならびに紀元前536年とクロス王は、1989年における「終わりの時」を表し、この二人の王はレーガン大統領とブッシュ（父）大統領を予型する. 紀元前538年と紀元前536年は、一つの道標を表すものとして両方の年代が理解されつつ成就する道標を示している. 「終わりの時」の道標は二つの象徴から成り、そして時として、レーガンとブッシュ（父）の場合のように、その二つの象徴が同一年において成就することがある. しかし、それは原則に対する例外である. というのは、モーセの時代における「終わりの時」の道標は、アロンとモーセ両者の誕生であり、その間は三年隔てられていたからである. キリストの歴史においては、それはバプテスマのヨハネとキリストの誕生であり、その間は六か月隔てられていた.

反キリストの歴史における「終わりの時」は1798年と1799年であった. フランス革命は預言の対象であり、1789年に始まり、1799年に終わるまで10年間続いたが、それは定められた時に起こったのであり、1798年が定められた時であったのと同様である. これらは合わせて、獣に与えられた致命的な傷、および獣にまたがってそれを支配していた女を指

し示している。ダリウスは「壁」を通して軍勢を送り込み、敵を打ち破った王であり、彼は「鉄のカーテン」の壁を打ち倒して敵を打ち負かしたレーガンを表している。キュロスは最初のブッシュを表している。なぜなら、キュロスは「大キュロス」として知られており、最初のジョージ・ブッシュは「大ブッシュ」であり、最後のブッシュは「小ブッシュ」だからである。

なぜなら、これら二人の王と彼らが表す二つの日付は、実は一つの象徴だからである。一方は、バビロンが支配する七十年を示している。その七十年の期間は紀元前538年に期が満ち、それはダレイオスによって表される。他方は、七十年の捕囚の満了であり、紀元前536年に期が満ち、キュロスによって表される。両者は合わせて、預言の光の封印が解かれる「終わりの時」を表している。1798年には、黙示録14章の第一の天使が「終わりの時」に到来し、ホワイト姉妹はその天使は「イエス・キリストにほかならなかった」と言っている。

キュロス王の在位三年に、神の民の大君であり、天使たちを統べる大天使でもあるミカエルが天から下ってキュロスに働きかけ、神の民がエルサレムに帰還し、都と聖所、通りと城壁を再建することを可能にする三つの勅令のうち最初のもの布告へと彼を導く光を確認した。その働きは、1798年の「終わりの時」に始まった第一と第二の天使の働きを予表していた。

ダリウスとキュロスの時代の「終わりの時」におけるミカエルの降臨は、1798年に第一の天使が到来したことを表しており、そしてそれらは共に、1989年の「終わりの時」に同じ天使が到来することを示している。1989年は「終わりの時」の期間の始まりであり、また定めの時でもあった。定めの時とは、預言的な期間の終結を示すものである。1863年、現代の霊的イスラエルにとっての最初の「カデシュ」における反逆は、1989年の「定めの時」に終結する126年間の期間の始まりであった。126は1260の十一、すなわち十分の一であり、1798年、1260年の終わりに、第一の天使の運動が歴史の中に到来した。126年の終わりである1989年には、第三の天使の運動が歴史の中に到来した。

ダニエル書11章1節で、ガブリエルは、表されている歴史が1989年の「終わりの時」にキュロスから始まることを、慎重かつ正確に示している。そこでのキュロス大王は、より偉大なブッシュを表しており、その後三人の王が続き、さらに彼らすべてよりはるかに富む第四の王が現れる。したがって、ギリシア全土を奮い立たせるその富める第四の王は、1989年以降で六人目の大統領である。

第十章の出来事では、ダニエルは嘆き悲しむ者として描かれており、彼はその幻を仰ぎ見ながら、嘆きの中でキリストのかたちへと変えられる。二十一日間の嘆きの期間は、最後に復活で締めくくられる死の期間を表している。第十章では、ミカエルが天から下って来ており、ユダ書七節では、彼が降りて来るとき、モーセを復活させる。黙示録第十一章では、モーセ（およびエリヤ）が殺され、象徴的な三日半のあいだ通りで死んだままである。その後、モーセ（エリヤとともに）は「大きな声」によって復活させられる。

そして三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大なる恐れが臨んだ。彼らは天から「ここに乗って来なさい」と告げる大きな声を聞いた。すると彼らは雲に包まれて天に上って行き

、彼らの敵はそれを見た。黙示録 11:11、12.

復活させる「大いなる声」は大天使の声であり、その大天使はミカエルである。

主ご自身が、号令と大天使の声と神のラッパの響きとともに、天から下って来られる。そして、キリストにある死者がまず最初によみがえる。テサロニケ人への第一の手紙 4章16節。

モーセとエリヤが殺され、そして復活するその歴史は、十四万四千人の印が押される歴史である。その歴史は、2001年9月11日、黙示録十八章の御使いの「第一の声」とともに始まったのであり、その声についてホワイト姉妹は、ニューヨーク市の大建築物が投げ倒された時に到来したものとして示している。黙示録十八章の「第二の声」は、間もなく到来する日曜法の時に発せられ、その時、神のほかの群れがバビロンから呼び出される。まさにその歴史、すなわち印の歴史において、ダニエルは「marah」の幻を見ることによってキリストのかたちに変えられる者として表されているが、それは「mareh」の幻の女性形表現である。それは「使役的」な幻であり、見られるそのかたちが、それを見る者たちのうちに再生されることを「引き起こす」のである。

その封印の歴史と、ダニエル書第十章におけるダニエルの変容の歴史には、ミカエルが降臨し、モーセ、エリヤ、ダニエルに象徴される者たちを復活させ、変容させる出来事が含まれている。彼は大天使の「大いなる声」によってその復活を成し遂げる。こうして、最初と最後の声（いずれも同じで、どちらも黙示録第十八章の声）との間に、第三の「声」が置かれる。中間の声では反逆が表される。というのも、ミカエルがモーセを復活させたとき、反逆の首謀者であるサタンが抗議に来ていたが、ミカエルはサタンと論争しなかったからである。

しかし大天使ミカエルは、悪魔と争い、モーセの遺体のことで論じ合ったときにも、彼をのしる言葉で訴えることはあえてせず、「主があなたを戒められるように」と言った。ユダ 7節。

2001年9月11日に始まり、やがて到来する日曜法をもって終わる封印の時の始まりには、「真理」の署名が記されている。というのは、その期間のただ中に当たる2023年7月、大天使の大いなる声が、その中間の声を聞くことを選ぶ、キリストにある死者たちを復活させる働きを開始したからである。2023年は2001年の二十二年後に当たることに留意しなさい。そして二十二は二百二十の十分の一であり、二百二十は神性と人性との結びつきの象徴であるとともに、回復の象徴でもある。

2023年7月、イエス・キリストにほかならぬその力ある御使い、すなわち真理であり、またミカエルであり、さらに御手にメッセージを携えて降って来られるアルファでありオメガであるお方が現れた。御手にあるその小さな書は、終わりの日まで封じられていたダニエル書の一部である。

『黙示録』において、聖書のすべての書は合流し、完結する。ここで『ダニエル書』は補完される。一方は預言、他方は啓示である。封印されたのは『黙示録』ではなく、終わりの時に関する『ダニエル書』の預言の部分である。御使いは命じた、「しかしあなたは、ダニエルよ、このことばを秘め、書を封じよ。終わりの時まで。」ダニエル

書12章4節。『使徒行伝』585頁。

ダニエル書の預言のうち、終わりの時に関する部分は第11章である。すなわち第11章の最後の六節だが、より正確に言えば、その最後の六節で繰り返されているのは、章中に記された歴史的記述である。

「私たちには無駄にできる時間はない。困難な時代が私たちの前に迫っている。世界は戦争の機運にかき立てられている。まもなく、預言に語られている苦難の出来事が起こるだろう。ダニエル書第11章の預言は、ほとんど完全に成就しようとしている。この預言の成就として起こった歴史の多くが繰り返されるだろう。」Manuscript Releases, 第13号、394。

ダニエル書第十一章十六節は、四十一節で繰り返される歴史を示している。なぜなら、その節では北の王が麗しの地に立つからである。十六節の歴史は、ローマの将軍ポンペイウスがユダとエルサレムを捕囚にしたのがいつであるかを示している。

しかし、彼に向かって攻めて来る者は、自分の思うままに行い、誰も彼の前に立つことはできない。彼は麗しい地に立ち、その地は彼の手によって滅び尽くされる。ダニエル書 11:16

私は、この節に先立つ諸節を考察するための錨としてこの節を用いるつもりであるので、まずこの理解を確立しておく。私たちは、第三節と第四節におけるアレクサンドロス大王の王国の分裂に続く歴史が一九八九年に始まり、次いで現在のウクライナ戦争、西側の勢力に対するプーチンの勝利、そして第十六節へと導くその後のプーチンの敗北を示していることを明らかにしようとしている。

「エジプトは北の王アンティオコスの前に立ちえなかったが、アンティオコスもまた、今や彼に向かって来たローマ人の前に立ちえなかった。この台頭しつつある勢力に、もはやいかなる王国も抵抗することはできなかった。シリアは征服され、ローマ帝国に併合された。すなわち、紀元前65年、ポンペイウスがアンティオコス・アシアティクスからその領有を奪い、シリアをローマの属州としたのである。」

「同じ勢力はまた聖地に立ち、それを食い尽くすことになっていた。ローマは紀元前61年、同盟によって神の民であるユダヤ人と結びつき、この年から預言の暦において顕著な位置を占める。しかしながら、実際の征服によってユダヤを支配下に置いたのは紀元前63年になってからであり、その経緯は次のとおりである。

ポントスの王ミトリダテス討伐の遠征から戻ったとき、ユダヤの王位をめぐるヒルカノスとアリストブロスの二人が争っていた。彼らの争いはポンペイウスの裁きに付され、彼はまもなくアリストブロスの主張の不当さを見抜いたが、長らく念願していたアラビア遠征を終えるまでこの件の裁断を先送りにし、そののち戻ってきて、公正かつ妥当と思われる形で彼らの問題を決着させると約した。ポンペイウスの真意を見抜いたアリストブロスは、急ぎユダヤに戻って臣民を武装させ、強力な防衛の準備を整え、自らの王位が他者に裁定されることを予見して、どのような危険を冒しても王位を守り抜く決意を固めた。ポンペイウスはこれを厳しく追撃した。彼がエルサレムに近づくと、アリストブロスは自らの振る舞いを悔い始め、出迎えて全面的な服従と多額の金銭を約束し、事態の收拾を図った。ポンペイウスはこの申し出を受け入れ、兵

の分遣隊を率いるガビニウスを送り、金を受け取らせた。ところがその副将がエルサレムに到着すると、城門は閉ざされ、城壁の上から、その都市はその合意を守らないと告げられた。

ポンペイウスは、このように欺かれることを容赦せず、手元に留め置いていたアリストブロスを鎖につないで、直ちに全軍を率いてエルサレムへ進軍した。アリストブロスの支持者は町を守ろうとし、ヒルカノスの支持者は門を開こうとした。後者が多数派となって優勢になったため、ポンペイウスは自由に市内へ入ることを許された。するとアリストブロスの一党は神殿の丘に退き、ポンペイウスがそこを攻略しようとして固く決意していたのと同じだけの覚悟で、その場所を守り抜こうとした。三か月ののち、突撃に足る突破口が城壁に開かれ、その地は剣の力で制圧された。続く凄惨な虐殺で、一万二千人が殺された。歴史家はこう記している。ちょうど祭儀に従事していた祭司たちが、周囲で仲間たちが虐殺され、ときには自らの血がいけにえの血と混じり合うほどであったにもかかわらず、荒れ狂う騒擾には気づかぬかのように、平静な手つきと揺るがぬ意志でいつもの務めを続けているのを見るのは、胸を打つ光景であった。

「戦争を終結させたのち、ポンペイウスはエルサレムの城壁を取り壊し、いくつかの都市をユダヤの管轄からシリアの管轄へ移し、ユダヤ人に貢税を課した。こうしてエルサレムは初めて、征服によって、『栄光の地』を徹底的に滅ぼし尽くすまで鉄の手で握りしめることになるその権力的手中に置かれた。」ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』259、260

次回の記事でこの研究を続けます。

神の民の間に論争や動揺がないという事実を、彼らが健全な教理を堅持していることの決定的な証拠と見なすべきではない。彼らが真理と誤りを明確に識別していないのではないかと恐れる理由がある。聖書の探究によって新たな問いが生じず、真理を持っていることを確かめるために人々を自ら聖書を調べることにへと駆り立てるような意見の相違も起こらないときには、昔と同様、今も多くの方が伝統に固執し、何を礼拝しているのかも知らないまま礼拝するだろう。

私に示されたのは、現在の真理を知っていると公言する多くの人々が、自分が何を信じているのかを知らないということだ。彼らは自らの信仰の根拠を理解しておらず、今この時のための働きの真価を正しくわきまえていない。試練の時が来るとき、今は他者に説教している者たちでさえ、自分たちの立場を吟味してみれば、満足のいく理由を示せない事柄が多くあることに気づくだろう。このようにして試されるまで、彼らは自らの大いなる無知を知らなかった。また、教会の中には、自分は信じていることを理解しているのだと当然のように思い込んでいる者が多いが、論争が起こるまでは、自分の弱さを知らない。同じ信仰を持つ者から引き離され、ただ一人で自分の信仰を説明することを余儀なくされたとき、彼らは、自分が真理として受け入れてきたものについての考えがいかに混乱しているかを知って驚くだろう。確かに私たちの間には、生ける神から離れ、人に頼り、神の知恵の代わりに人間の知恵を据えるという背離が起こってきた。

神はご自分の民を目覚めさせられる。ほかの手段が功を奏さないなら、異端が彼らの間に入り込み、それが彼らをふるいにかけ、もみ殻と麦とを選り分けるだろう。主は

、ご自分の御言葉を信じるすべての者に、眠りから目を覚ますよう呼びかけておられる。今この時にふさわしい尊い光が与えられている。それは、私たちの目前に迫っている危険を示す聖書の真理である。この光は、聖書を熱心に研究し、私たちが取っている立場を最も厳密に吟味することへと私たちを導くべきである。神は、祈りと断食をもって、真理のあらゆる側面と立場を、徹底して忍耐強く探求することを望んでおられる。信じる者たちは、真理とは何かに関する憶測や漠然とした考えに安住してはならない。彼らの信仰は、試練の時が来て、その信仰について答えるために評議会の前に引き出されるとき、彼らの内にある希望について、柔和と畏れをもって理由を述べることができるよう、神の御言葉の上に堅く据えられていなければならない。

働きかけ、働きかけ、働きかけよ。私たちが世に示す主題は、私たち自身にとって生きた現実でなければならない。私たちが信仰の根本教義と見なす教理を擁護するにあたっては、完全に健全と言えないような議論を決して用いてはならない。そうした議論は反対者の口を封じることではできるかもしれないが、真理を尊ぶものではない。私たちは、反対者を黙らせるだけでなく、最も厳密で徹底した吟味にも耐える健全な論証を提示すべきである。論争家として身を磨いてきた者には、神の言葉を公正に扱わなくなる大きな危険がある。反対者に対するとき、単に信者に確信を与えることを求めるのではなく、その人の心に確信を呼び覚ますような仕方で主題を提示することこそ、私たちの真剣な努力であるべきだ。

たとえ人間の知性がどれほど進歩しようとも、いっそう大いなる光を得るために聖書を徹底して絶えず探究する必要はないなどと、片時たりとも考えてはならない。私たちは民として、各々が預言を学ぶ者となるように召されている。神が私たちに示してくださるいかなる光の一筋も見分けられるよう、私たちは熱心に見張っていなければならない。私たちは真理の最初のきらめきを捉えるべきであり、祈り深い学びを通してさらに澄んだ光が与えられ、それを他の人々の前に示すことができる。

「神の民が安逸に流れ、現在与えられている光に満足しているとき、神は彼らをお喜びにはならないと確信してよい。彼らのために輝いている増し加わり続ける光を受けるために、常に前進していることこそが神の御心である。現在の教会の態度は神の御心になっていない。より多くの真理と、さらに大いなる光を必要としないと彼らに感じさせる自己過信が入り込んでしまっている。私たちは、右にも左にも、前にも後ろにもサタンが働いている時代に生きている。それなのに、民としての私たちは眠っている。神は、ご自分の民を奮い立たせて行動へと駆り立てる声が聞こえることを望んでおられる。」 Testimonies 第5巻、707、708。